







1冊もNo.1のHミチなレミキゅん本!

夜は

○○○

おもてんキョウ

レミキゅん!!

\*十八歳未満の皆さまにはお読みいただけません

成人向け



05 …『少年美学の嗜好』 よもぎりんご

13 …『くらいくらいみち』 みつる

23 …『夢見ることり』 蛭

29 …『Intermission - 一夜の現世 - 』 翠架 悠汰

35 …『いや×しロイド』 ぷる

42 …『大当たりかもしれない』 NTK

48 …『マスターの夢は…』 いたる

54 … 執筆者あとがき

表紙●いたる  
 ロゴ●翠架悠汰  
 その他●よもぎりんご



よし！  
オケが完成したぞ  
あとはレンに歌って  
もらえば：

お待ちせよ  
レン君出番だよ

っっ！！

おっおっ  
お見せよ！！



何かベッドの下の  
ジヤンブに挟まった  
本があったから

!!!  
!!!  
!!!



少年美学の嗜好。♡  
よもぎりんぞ

↑ジヤンブの本



ふらん  
マスターってこんな  
趣味だったんだな…

ここ来てからリンを  
見たことないんだけど  
俺の事買ったのも  
そーゆう目的だろ？

童貞

06

レンきゅんが  
可愛くて  
買いました…  
スママセン！

WUNDOMIN

…で  
マスターは  
その変な本みたいに

エツちな事…  
したいの？



はっ…!?  
ハイハイイイ!!!  
そりやもう!

漫画に気持ちいいって  
書いてあったし  
特別に俺が相手して  
やってもいいけど…

じゃあ  
お願い  
します!

ぬん

あッ

アキカ  
アキカ  
アキカ

とりあえず…  
コレを舐めれば  
いいんだよね?

アキカ



し…信じらんねえ！  
どんだだけ早漏なんだ  
お前…

ちよっ!!!

レ…レン君…  
はあ…はあ…

はあ…はあ

あ…あんまり  
調子こいてん…じゃ  
ねえよ…っ

ん…っふう…  
レンきゅん…

あうっ

息が生温くて  
気持ち悪いっ





もく我慢  
出来ないいい!

はあ...はあ

あつ  
ちよつと待て  
ってば...ア

!!!

あつあつ  
レンくんの中...  
す...スゴ...  
すごくいいよお  
レンきゅん...ツ!



痛い...いたっ

俺のちんちんが  
奥でキュってしまつて  
またすぐ出そウ...ツ

10  
15  
20



ちよ…キツツ！  
ちよま W W  
ちぎれるから W W  
ちんこちぎれる  
からあア… W W

レンきゅんお尻  
気持ちいい？ねえ？  
ココ？ココ？  
いいよね W

うわあ W W  
でる…！出ちゃうからあ！  
って動いてるの俺か W W W  
腰とまんねや W W

だってレンきゅんが  
ぎゅってするから W W

マスターキモい！  
でも俺もなんか変…ッ  
なんか…くるう…ッ

マスターああ  
激し…いい…！

まじきょ  
出る… W W









毎 は 回  
あ  
2008.11  
き  
に  
は  
は





あのさー

そごどいて  
くんない？

くらい  
くらいみち  
みつる



だーめ

これから俺達の  
相手してもらおうよ



ちよ  
やめっ





お

やっと起きたぜ

!!!

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん





へーそお...

やめろ...!

おちんちんこんなにしてるのに、そんなこといえるんだ?

あつ

やだ...  
はなしてっ



おい、見ろよ

トロトロだぜ

誘ってやがるW





アアあ!

ひアア

あぐっ

あぐっ  
あぐっ  
あぐっ

んや  
何?

そうそう、  
おくまで啜えて  
飲んでね

はいはい、あーんしたまま  
コレを舐めようね〜啜んだ  
らどうなるかわかるよね?

コイツのケツ穴

俺の指飲み込んで  
吸い付いてくるぜw  
もっと奥まで挿し込んで  
ほしいってか?w

ピッピッ!

ヒッヒッ!













うああああああああアッ









おいおい、  
休憩はまだだぜ？

ひあ  
抜けちゃっ

なあにい？



おやおや  
挿れただけで  
イってしまっ  
ましたか

あ  
あは☆







俺たち全員  
満足させて  
もらおうからな

ああ…

ああ…



あつあ…  
おちんぽおいひい  
もつとお

やああ、  
奥までほぐすの  
スズンって  
しごと  
おはらして

きもちいいなあ……



自分には生き別れの弟がいる——。

別に誰かに明かされたわけではなく、

物心ついた時からその事実を知っていた。

逢った事も無いその存在に酷く惹かれ、焦がれていた。

時は流れ、俺が十八になった時

友人に連れられ立ち寄ったとある遊郭に、

自分と容姿が瓜二つの陰間がいた。

夢見る  
ことり  
—蛭—





はあ……う  
……



……あ……う



……う……う……う……

い……



……

其処にいた弟は

まるで「小鳥」だった。



幼いながら憂いを帯びた容姿。

自分と瓜二つだが自分には無い其れに

俺は益々惹かれていた。

「此処を出て共に暮らそう」

彼を外の世へ連れ出したくて

俺は彼を誘おうとした。

だが彼は

其れを拒んだ。

此処以外の世界は怖い…。

其れはまるで

羽ばたく事を恐れた

雛鳥のよう。

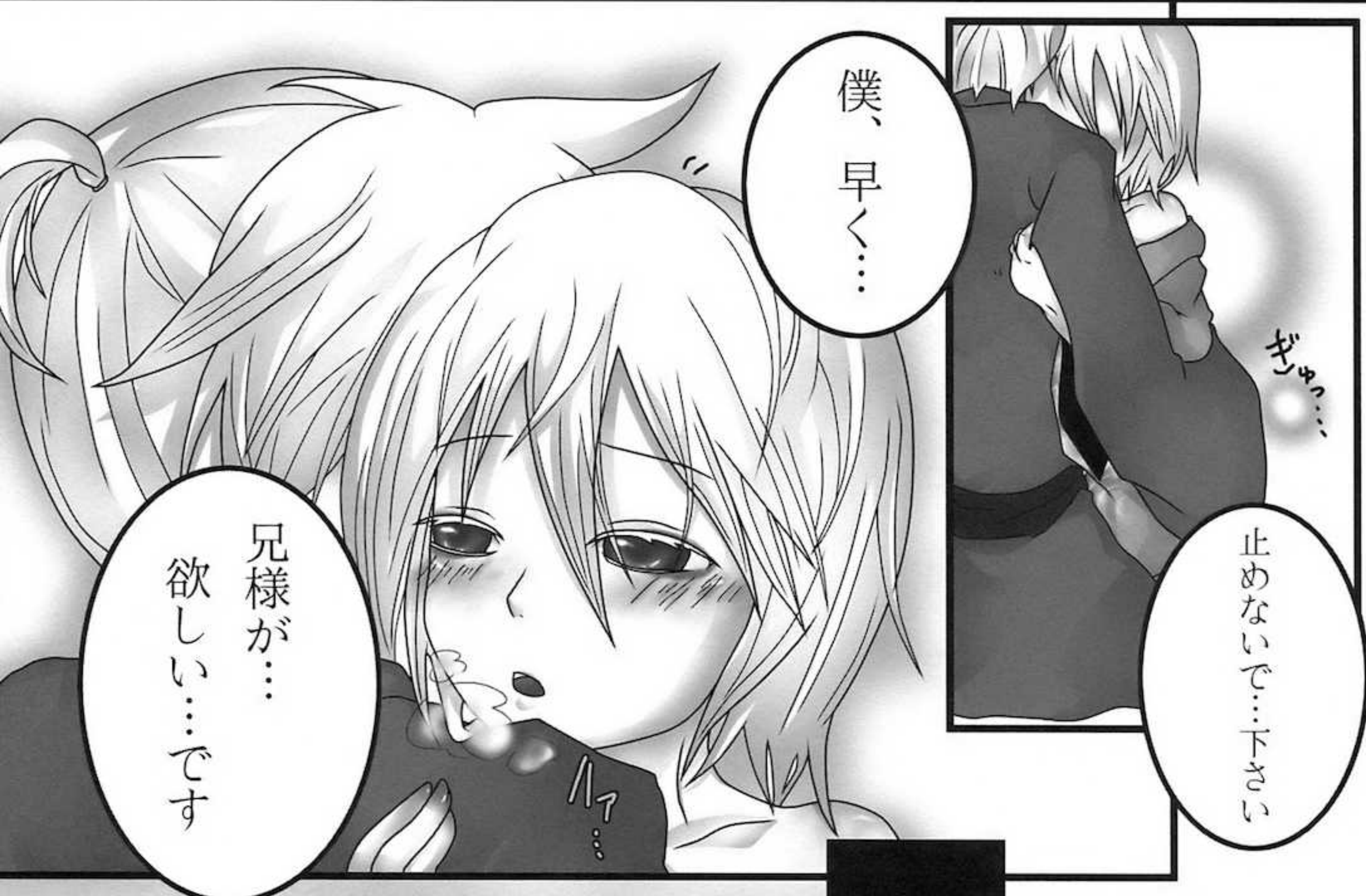
俺は二体

どうしたらいい…？

結局俺は彼が望むが俣に  
抱いてやる事しか出来ない。

…兄様…？





僕、早く…



ぎゅん…

止めないで…下さる

兄様が…  
欲しい…です



嗚呼。

ス…

…分かってる

結局俺も  
こいつに魅せられた  
籠の鳥という事か。

ガッ

あ……っ





ズク  
!

あつ...あつ...

あつ...あつ...  
あつ...  
あつ...

うあ...あ、やあ...っ

あつ...兄...様!  
も、もう...駄目...っ!

//y  
//y

ぐちゃ、  
ぐちゃ





はたはた...

ふっ...あ...っ！

これでいつか貴方が  
心を開いてくれるなら

こうしてお前の涙を  
受け止められるなら

もう此の仄でも  
構わない。





——虚ろな眼差しで、空をじっと眺めていた。

蒼穹の瞳には、どこまでも灰色の雲に覆われた空だけを映し、今にも泣き出しそうな天気がまるで自分の心情のように感じてしまう。やがて、程なくして零れ落ちてくる水滴に全身が濡れようとも、少年はその場に蹲ったまま。立ち上がることもせず、裏寂れた路地の壁に背を預けていた。

振りしきる雨が少年を覆う。

それでも構わないと彼は思う。頬を伝う温かいものを隠してくれ  
るから。

どうやってここまで歩いてきたのか。それすらも不明のまま、後  
はこのまま朽ちればいいと、本気で思っていた。

生きる目的も、希望も、あの時、自分の中では無くなってしまっ  
たんだから。

「……たあ……」

零れた微かな呟き。直後、少年の視界を遮る影。

だが、感情の麻痺した少年にとっては驚くこともなく、ぼんやり  
とその影を双眸に映し、僅かに首を傾げるだけだ。

そんな反応に影が怪訝な表情を浮かべたが、それすらも彼にとつ  
てはどうでもいいこと。自分に構わず、早くどこかへ行ってくれれ  
ば、そう本気で思っていた。

どうせこの身は……。

そう思った時、不意に目の前に差し出されたのは、影が差し出し  
た手。え、と顔を上げた先にあつたのは、自分を見る強い視線。

笑っているのでもなく。哀れんでいるのでもなく。

だから、少年は……。

# Intermission

## — 一夜の現世 —

written by Y.Suica



……うつすらと目を開けたレンの目に飛び込んできたのは、さっきまで見ていたどんよりした雲ではなく、薄汚れた天井だ。一瞬、自分がどこにいるのか判断しかねたが、すぐに思い出して頭を軽く振った。

まだ部屋の中は薄暗く、夜明けまでには時間がある。

「はあ……」

(また、あの夢か)

最近、とみに見る事の多くなった夢を思い返し、レンは小さく溜息をついた。

ゆっくりと身体を起こし、隣に寝ている存在に気付かれぬようにそっとベッドを出る。シートから抜け出した身体には、何も身につけていない。別段寒さを感じることもないから、レンはそのまま水を飲むために台所へ向かった。

ボーカロイド——前世紀の初頭に製造された歌を歌うための機械人形。その後起こった幾度かの大戦の最中、製造は中止されて全ての機体は廃棄された、筈だった。

自分がその機械人形だとレンは知っている。

けれど、何故自分が廃棄されなかったのか、その理由を知る者はもはやいない。ただ長い間、ずっと凍結されていた、らしい。

そして初めて起動された時、自分の視界に認識した者を『マスター』と呼んだ。

それからは——ずっと『彼』と一緒にだった。

『彼』がレンに世界を教えてくれた。

レンにとって……『世界』は『彼』自身だった。だけど、彼はもうどこにもいない——。

少し俯いたまま寝室へ戻ったレンは、そこに寝ている男を見て何か胸の裡がモヤモヤしてきた。

自分の中で回答の出ない問いかけが、頭の中をぐるぐる回る。さつき見ていた夢のせいで、いつにも増して自分が暗くなっているのが解る。

「なんで……」

——オレを拾ったんだ？

繰り返した質問。

その度に男は、『別に、なんとなくだ』そう繰り返した。もう二度と、誰にも心を開かないと決めていた。

それなのに、何時の間にかレンの中で男の存在は、もはや切り離せないものになっていた。

それでも。

「——あんたも、どうせ……」

オレを置いていくんだろう？

口に出さず呟いて、レンは両手をそっと男の首へと当てた。歌う為に造られたとはいえ、人と違う自分がその気になれば、人以上の力が出せる。その命など簡単に奪えてしまう。

人でないオレを置いて、あんたも先に……。

それなら、今この場でオレが……。



「——どうした？ さっさと力入れないのか？」

不意に聞こえた声。

ハッと顔を上げれば、男の目が開いてじっとレンを見ていた。慌てて手を首から放そうとしたけれど、逆に男に取られてそのまま首に宛がわれた。

「なにを?!」

「このまま絞めるつもりだったんだろ？ いいぜ、お前にやられるなら構わないさ」

「な、なに言ってるんだよ！ 気付いてたのならどうして」

男の淡々とした物言いに、レンは思わず怒鳴っていた。

そうだ。目の前の男は、気配に凄く敏感だ。彼の遍歴こそ詳しくないが、それなりに修羅場をくぐってきた事は、鍛え上げられた身体つきを見ればすぐに解る。

その男が、レンが起きたことに気付かないワケがない。それなのにレンの行動を止めるどころか、逆に構わないと？

「別に。どうせこれまで、何の目的もなく今まで生き延びてきたんだ。それならお前の手にかかって終わらせるのも悪くないと思ってな」

いつものふざけた口調だ。

そうと解っていても、見つめる視線の真摯さが、レンの言葉を詰まらせる。まるで凄く口説き文句を言われた気がした。

それまで張り詰めていた場の空気が、一気に軽くなったように思いい、レンは真つ赤になった顔を隠すようにそっぽを向いた。

「ふ、ふざけるのもいい加減にしるよ、マスター」

勢いつけてマスターと呼んだ男の手を振り払う。

そんなレンの反応も、男にとっては見慣れたもので苦笑を浮かべるだけだ。そのまま、男の笑みが企みを持つニヤツとしたものへと変わった。

「な、なんだよ？」

「別に。しかし、まあ……そんな格好で乗っかってくるから、てっきり昨夜のだけじゃあ物足りなかったのかと思ったんだが」

「へ？」

虚を突いた男の科白に、レンの目がまん丸くなる。

そして、改めて今の自分の格好と二人の状況を見返した。

レン自身は何も身につけていない素っ裸で、昨夜の行為を鑑みるに当然男も同じ格好だ。更に自分はシートの上に乗っている形その一枚下には当然男の体がある。ちようど腰がレンの太腿に当たる位置だ。

つまり——。

「ちようど！」

レンの下半身——ちようど太腿の内側辺りに、シートを押し上げる形で硬いものが当たっていた。

「言っておくが、お前が誘ったんだからな。しっかりと受け止めるよ」

「バツ、何言ってる……オレ、そんなつもりじゃ」

飛び上がって慌てて逃げようとしたレンを、素早い動きで男はシートごとその体を抱え込んだ。腰をぐいっと引き寄せると、ピツタリと自分の身体と密着させる。

伝わってくる熱に、一瞬レンは身を固くした。



その隙を逃さず、男——マスターがレンの顔を上向させた。

「マス——」

続く言葉は、彼によって封じられる。抗議しようとして開いた口の中に強引に侵入してきた舌が、熱っぽくレンの中を蹂躪した。

「……ん、んっ……うあ」

舌が絡まり、歯列をなぞられ、零れる吐息は熱を帯びて喘ぎとなる。飲み込みきれない唾液が口の端から零れ、首筋を伝う感触にレンは思わず身震いした。

なんとか離れようと腕に力を入れてみても、しっかりと身体を抱き留められてしまっていて、加えて徐々に全身に広がる快感にうまく力が入らなかった。

「ふ、うん……ちよ、ます、たあ……」

「レン、お前もその気だったんだろ？」

「ちが」

「ふうん。その割には感度良すぎるよな」

「ひやあっ！」

離れた唇がレンの首筋の舐める。

瞬間、身体が跳ねて声が上がった。

その反応に気を良くした男は、ニツと口元に笑みを浮かべたまま、徐々に顔を上げていった。

肩甲骨、肩口、脇腹、胸元。あらゆる箇所には赤い徴が点々と刻まれていく。昨夜の名残の熱が、徐々にレンの中で燻っていく。

「あ、はあ……やああ、あん……」

こんなことするつもりは毛頭なかったのに、すっかり快感に慣らされた身体は、男の手管にいと也容易く翻弄されていく。

胸の硬くなった部分を指で弄られ、弓なりに背を撓らせた。

「や、ああん！」

「すっかり開発されちゃったか」

「あ、そん、なん……マスターの、せい……はあ、ん、だろ」

喘ぎの間に文句を告げるレンに、男は苦笑を浮かべる。

「じゃあ責任取ってやるよ」

言うなり、男の腕が下がってレンの臀部を掴む。

「あっ！」

張りのある双丘を掻き分け、窪んだ場所にある小さな口へと指が伸びてきた。つぶ、と音を立てて、男の指の侵入を簡単に許してしまふ。

「はあん」

「すっかり準備はいいようだな」

「あん……だ、だって……まだ……」

からかう口調にレンは思わず抗議した。

昨夜の行為の痕跡がまだその場所に残っているのだ。とろりとした液体が溢れ出てくる感触に、レンは思わず力を入れた。そんな無意識の行為が、まるで指だけでは足りないという意思表示のように、きゅつと男の指を締めつけた。

それに思い至って、レンは顔を真っ赤にする。

が、男は気にすることなく、後孔を更に解すように何度も出入りして刺激していった。一本が二本へ、三本となり、それすらもすっかり飲み込むようになったが、さすがに苦しくなって吐く息が荒くなる。

「あ、ああは、ふわあっ」



「そろそろいいか」

耳元で呟かれ、その声にすら今のレンは反応してしまふ。

力の抜けた体を横たわらせ、剥いだシーツの向こうに見えた男の質量に、レンは今更ながらぞくりと震えた。秘所に宛がわれた硬い肉の感触。

「——あ、はあ……う、ん——」

自分の中に押し入ってくる感触。一度広げられた身体は、もう元に戻らない。

「あ、ああ……ますたあ……」

零れた残滓が擦られ、ぐちゅつと水音を立てる。

息が詰まりそうになりながら、なんとか全てを受け入れたレン。

じんわりと滲む涙に歪む視界の中、自分を見下ろす男を見た。

「ま……」

「違うだろ。こういう時、なんて呼ぶか教えただろうが」

飛びそうになる意識に届いた声。

男の腕が背中へ回り、下肢が繋がったままゆつくりと抱き起こされた。その拍子に自重の強さが加わって、更に奥まで抉る形となった。

「ひやあつ、ああ！」

「言っただろ……呼べ、と」

何を、と問い質すよりも早く、男の腰が動き出した。纏まらない思考回路を快楽の熱が更にかき乱す。背筋を貫く衝撃にレンはたまらず男の肩にしがみついた。

奥の、一番感じる場所に男の亀頭が突く。出入りするたびに、幹が襞を擦る。

「ひや、あんん、ああ……ますた、何を……あやあッ！」

「呼べよ」

問うても、男は同じ言葉を繰り返す。

甘い喘ぎの狭間、レンはなんとか思い出そうと考え続けた。飛びそうになる意識は——だが、寸前のところで男が動きを止める事で堰き止められた。

いきたくてもイけない。

そんな責め苦を味わうレン。

もはや顔中を涙と唾液でくちやくちやにしながら、必死で懇願した。

「やああ、マスター……ど、してああん、ふあつ」

「……マスターじゃ、ねえだろ？」

「ふ、ふえっ？」

囁いた男の声に、不意に記憶が繋がった。

『——普段は別に構わねえけどな、こういう時ぐらい名前で呼ぶもんだ』

……レンは腕を伸ばし、ぎゅつと男の首へしがみついた。

「——……」

そして小さく、口から零れたのは男の名。

届くかどうか解らないその囁きを受けて、男は今度こそ優しく微笑み返した。

「……上出来だ」

「あ、も……う、お、ねがい……も、と……奥まで」



既に限界に達していたレンは、恥も外聞も捨ててより強い刺激を強請った。

激しくなる腰の動きに呼応して、繋がった場所がじゅくじゅくと音を立てていく。強く中を抉られて生まれてくる快感に、大きな喘ぎを何度も上げた。

その度に、何度も男の名を綴る。

「も、もお……あ、あんう」

「ああ、いいぞ」

「ひやああ！ あ、だめ……お、オレ……で、ちや、う……や、ああああ——ッ！」

何度目かの突き上げが、レンの最奥を深く押し上げた。一気に駆け抜けた快感。その拍子に密着するほど抱きついた。

そして、すでに先走り濡れそぼっていたレンの性器が大きく震え、白濁したものが勢いよく爆ぜた。びくり、びくり、と何度も弾けながら飛び散らしていく。

「ああああ、ふえあ……」

当然、それだけで終わるわけもなく、後孔に深く刺さった肉棒を強く締め付けていた。

「——くっ！」

「ああ、あん……んんっ……」

直後、男自身もレンの奥深い場所で熱い滾りを進らせていた。じんわりと伝わる熱に、小さくレンが震える。その影響で残ったままの蜜を再び零していた。

全てを注ぎ込んで、男が離れようとしたのをレンが抱きついて引き止めた。

「……レン？」

「——も、すこし……このまま、で……」

縋り付くように伸ばされた腕。

男は、黙ってレンのしたいようにさせた。

強請るように顔を寄せてきたので唇を塞ぐと、そのまま何度も唇を重ね合った。身体に散った互いの体液で汚れる事も厭わずに。

——男の熱が伝わってくる。

それは、彼が生きている証。じつとそれをレンは感じている。自分に再び『世界』を与えてくれた人。

「なあ」

「ん？」

「約束、してくれよ……」

「約束？」

「ああ。オレを……置いて、いかないで」

言葉にした途端、レンの目に熱いものが再び浮かんだ。それを見られたくなくて、男の胸に強く頭を押し付ける。

だが、とつくに気付いているのだろう。

男は、ゆっくりとレンの頭を撫でながら、静かに告げる。

「わかった、約束だ。お前を置いて——逝かないさ」

そして、額へ優しくキスをした。

守られない約束を——本気で信じさせる誓いとして。





最近  
いそがしくて  
遊ぶヒマが  
ないよお

ふあーあ



ここんどこ  
ゲームも  
ずっと  
ほったらかし  
だし……

おん  
おん  
おん

おる  
いかにしロイド



ホイオンなんて  
仲間にしたっけ？

あれ？

……







ふう……  
紹介が遅れたね

ボク  
ホミン

知っている

いやあ  
死ぬかと  
思ったヨ

画面から  
出てきた？

今日はネ

出番が増えて  
お疲れモードな  
キミを癒しに  
来たんだあ

癒すって  
どーやって…

…い

!?

どーやって♡

ヒュッ





ちよ  
待っ…!

!?

キュルッ

キュルッ

ああっ!!

!!

マキユ

やあっ

モヤ

ピキ

ぬちゅっ

もぞり

あんっ

にゅ子

あッ

にゅ子こ

んっはあ…

ぬちゅっ

きゅ

きゅ

にゅ



ほら  
気持ちいい  
でしょ

あつ  
んつ

こっちも  
すごい元気に  
なってきたネ

あはつ  
我慢しなくて  
いいヨ  
いま出して  
あげる

やめ……つ

ああん!

ンッフ……  
可愛いネ……  
ンッフ

らめえつ

あつ

あんつ

やあつ!! もう  
出たうよお!!!









アハハー  
起きやがれー

痛ッ

ゴッ



ゲーム  
しながら  
寝るなんて  
いつも言っ  
てるでしょ!

さっきのは  
……夢?



おしまい?



■大当たりがもしれない

NTK

噂によると  
鏡音リンレンには

何百分の一の確率で  
「アタリ」が  
存在するらしい

うーむ……

?

「アタリ」というのは  
既に「調教済み」の  
モデルの事を  
言うのだが

説明書

……アタリ……

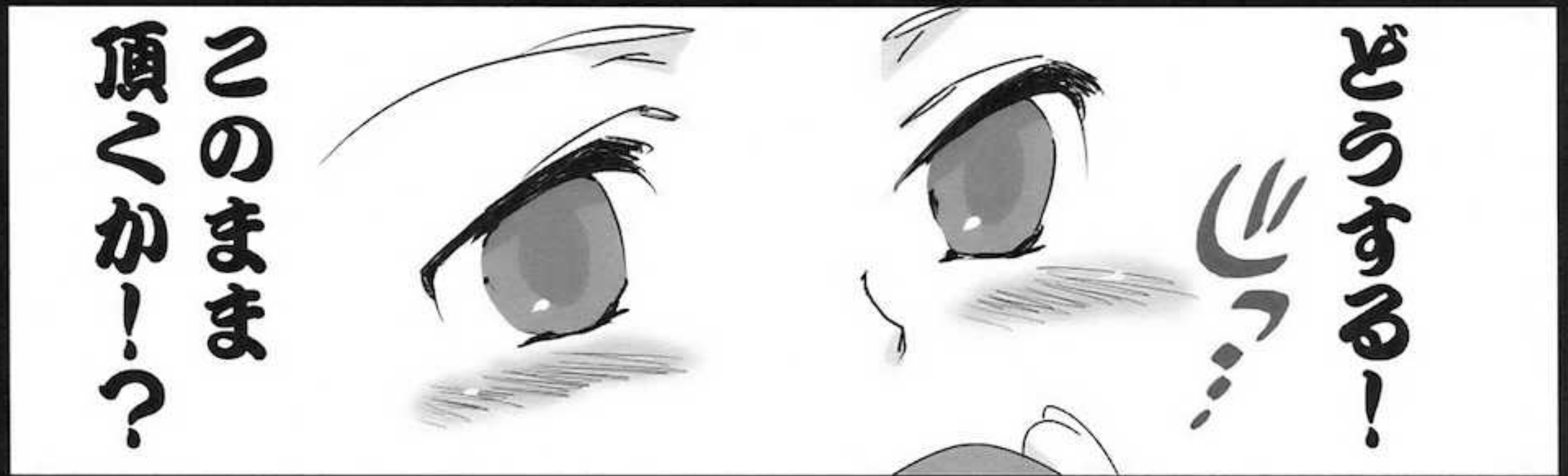








調教って  
こっちのですか。



どひさるー！

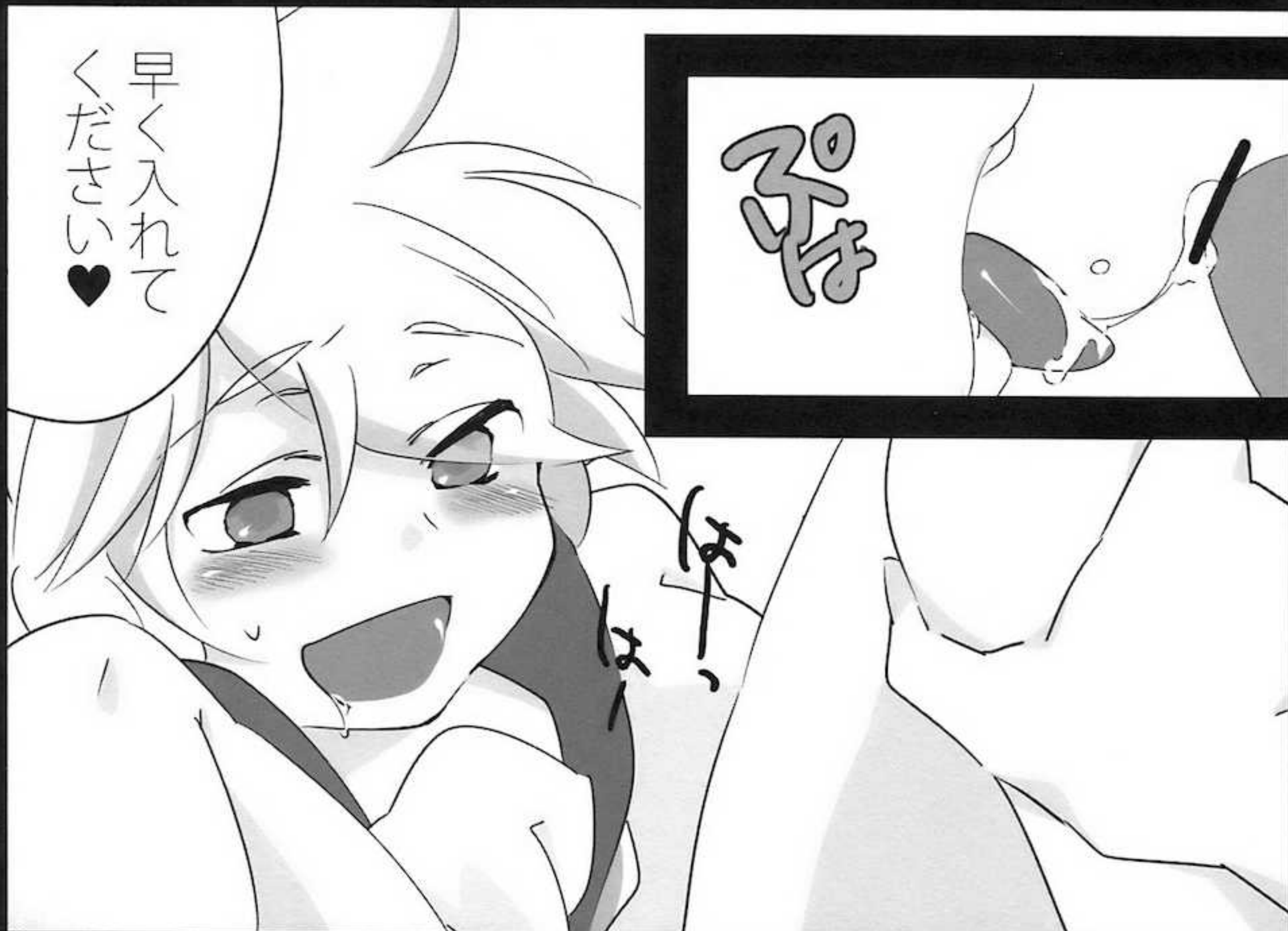
このまま  
頂くか！？



頂くに  
決まってんだ  
らおおおおお  
おおおおお

ガッ













やっちゃったな…  
ま っ っ っ っ っ っ っ  
これから  
レンきゅんとの  
めくるめく日々が  
えっへっへ…





先日買ったボーカロイドのレンが不思議そうにこちらを見ていた：まるで悪夢を見ているように



# マスターの夢は...

レン遅かったね：友達も待ちくたびれているよ：

いたる

友達と俺の痴態をみてレンは期待と不安が混じった目でこちらをみていた







されること  
すべてがまるで  
現実味を帯びない  
夢のように…



だだ、だめ  
だよレン君  
そんなところ!

すでにハッキングさ  
れた友達に啜えられて  
快感に身をゆだね  
ようとしている。



!!



何度も快楽を感じる  
ころにはもう力が  
入らずぐったりと  
その行為をするだけ  
の人形になっていた

そろそろ力も  
抜けて良い頃あい  
だろう…

今お前もお前の  
友達のよう  
にしてあげるからな?



だ、だめマスター  
そんなところは  
ないよ!!



大丈夫だよ、  
そういう  
ファンクションを  
インストールして  
あるから

だめっ!



あっ  
あっ  
あっ!!

あっ...ああああ!!



ズッ  
ウウウ

ビクッ

ビクッ









レン：これからは  
セクサロイドとして  
頑張るんだぞ。

そう：これが  
俺がボーカロイド  
を買った理由だ。  
ずっとこうするのが  
夢だったんだ



普段からそのような  
書物を読み漁っている  
俺はさらにそれを  
レンに強要する事に……

マスター……  
マスター朝だよ

今日は仕事  
休むの？

う……あ……  
もう朝か？

イ  
チ  
ユ  
ン

夢でした……  
しかも壮絶な  
夢精  
です……

もう……おねしよ  
間でして……取替え  
るから早く起きて！

ク  
ハ  
ッ

なあレン、セクサ  
ロイドに興味は  
あるか？

何？  
ないよ

またマスター  
変な本読んで  
たでしょ？

シヨタコミは  
変な本じゃ  
ないよ

いいから  
早く仕事  
行ってよ

完



# 執筆者あとがき

P5-12… よもぎりんご



今回はレン魔7人による合同誌です！  
どこ見てもレンきゅんのエロ本！なんと素晴らしい！  
夢のような本を作ることができて、参加してくれた  
仲間たちには感謝です！突発的な企画に  
乗ってくれてありがとう！！ありがとう！！

さて…今回の私の漫画は、今までのマズレンと  
ちょっとちがう、ヘタレマスター×レンでしたが…  
ヘタレマスター描いて楽しかったですw  
ちなみに、一部のセリフをMさんが考えて  
下さいましたww いい感じにキモいですww  
あと、レンが読んでいたショタエロ本の本文は  
昔の同人誌原稿が貼り付けてあります…  
何のジャンルかわかったらすごいよ！

ここまでお付き合いありがとうございました！  
機会があったら第二段もやりたいよ！

よもりん。







初めまして！

ひよんなことから、突然始まったレン受け合同企画、まさか自分がそこに一枚囁む形になろうとは……（汗人生、何が起きるかわかりませんねwww

しかもこんな豪華なメンバーの中、自分だけ字書きというちょっと場違いな感も否めませんが（苦笑ともあれ、書いた内容もアシな感じで……orz

少しでも楽しんでいただければいいのですがww

08.11 Y.Suika(葉の月)

P29-34… 翠架 悠汰

P35-41… ぷる

3、4年くらい前まで  
ていくびすら恥ずかしくて描けなかった私が  
R-18なるものに挑戦してしまいました。

ずいぶん落ちたなあ…なんて話したら  
『それは進化したと言うんだ!!』と  
カ説されました。

進化したすばらしい!! Δ(´▽`)

今の私がいるのも、すべてはレ>きゅんと  
レ>癡のみなさんのおかげです!!><

と、言うことで  
ゆっくり楽しんでいってね!





みん  
お疲れ様でした。

“エロく幸せうばいちゃん”  
を目指した結果が  
これだよ!

一家に一本  
いかかぞでしよう(笑)

結局返品は  
されなかつたようす。

NTK。

P42-47... NTK

P48-53... いたる

この度合同誌に参加  
させて頂きありがとうございます。  
実はエロマンが描くの初めてで  
不安はありますが、夜のおとせが  
出来ればうれしいです。  
いろいろシタコミをひらき出したので  
「似てるな〜こゆ」と思ったものは、多分  
まちがちなようです。

ふたんはけいさもたず、Pixivで  
シタとか鏡音レンちゃん  
ばかり揃ってます。  
もし、おウミかあは  
めてから下さる。

今回楽からた  
です。よせりんさん  
ありがとうございます。

◎いたる。



おしつけ。

発行日: 2008年11月30日

発行者: よもすがら (代表: よもぎりんご)

印刷所: 丸正インキ有限会社 様

禁・無断転載 / ネットオークションへの出品

※本誌についてのお問い合わせはよもぎりんご宛までお願い致します。

らんらくまき

- |        |  |
|--------|--|
| よもぎりんご | URL ● <a href="http://b.ap-mode.net">http://b.ap-mode.net</a><br>MAIL ● <a href="mailto:ringo@ap-mode.net">ringo@ap-mode.net</a>   |
| みつる    | URL ● <a href="http://www.pixiv.net/member.php?id=185007">http://www.pixiv.net/member.php?id=185007</a><br>MAIL ● <a href="mailto:vofa@excite.co.jp">vofa@excite.co.jp</a>                                     |
| 蛭      | URL ● <a href="http://www.pixiv.net/member.php?id=225973">http://www.pixiv.net/member.php?id=225973</a><br>MAIL ● <a href="mailto:hirurun88@yahoo.co.jp">hirurun88@yahoo.co.jp</a>                             |
| 翠架 悠汰  | URL ● -<br>MAIL ● <a href="mailto:y-suika@h3.dion.ne.jp">y-suika@h3.dion.ne.jp</a>   |
| ふる     | URL ● <a href="http://yofukashi.org/~a/">http://yofukashi.org/~a/</a><br>MAIL ● <a href="http://www.pixiv.net/member.php?id=10473">http://www.pixiv.net/member.php?id=10473</a>                                |
| NTK    | URL ● <a href="http://www.pixiv.net/member.php?id=173439">http://www.pixiv.net/member.php?id=173439</a><br>MAIL ● <a href="mailto:sperk_under_ones_breath@yahoo.co.jp">sperk_under_ones_breath@yahoo.co.jp</a> |
| いたる    | URL ● <a href="http://www.pixiv.net/member.php?id=7894">http://www.pixiv.net/member.php?id=7894</a><br>MAIL ● <a href="mailto:flarecrestmatu@msn.com">flarecrestmatu@msn.com</a>                               |





あ!

兄様が...

あぐっ

ボク  
ホ○ミシ

知ってる

エツチな事  
したいの?

ボクを  
歌わせて下さい

マスター

早く

新しいおね  
あつね  
軽

出番が増えて  
お疲れモードな  
キミを癒しに  
来たんだあ

今日はネ

悠汰 翠架

がる

NTK

いたる

じゅ